

作曲

石塚 潤一

昨年のこの欄も、円安の話題から稿を起こしたのだった。1ドルが157円台という円安状態で開始された2025年、ドルは140円を下回ることは一度もなく、加えて、対ドルのみならず対ユーロの円安も進み、1ユーロ162円台から開始した為替は、いまや180円を突破する危機的状況である。各国の物価、賃金などを考慮した、実質実効為替レートをみると、今や円の實力は変動為替相場へと移行した1973年2月以前のレベルへと落ち込んでいる。重要な論点なので繰り返しておく。クラシック音楽とは、元来、欧米からの輸入物であるわけだから、当然、為替レートの影響を大きく受ける。海外からの音楽家招聘の経費は増大するし、海外留学を目指す若者にとっては、経済面でのハードルがひと際高くなるだろう。経済的に潤沢な基盤をもつだけが海外での研鑽を続けられるという状態は決して健康的ではない。作曲界、ひいてはクラシック音楽界の総合的な地盤沈下をもたらすだろう。音楽関係者だって、経済、そして政治と無縁には生きられない。昨年、個人レベルでは海外からのゲストの招聘はほとんど不可能との、悲鳴のような声を幾つか聞いた。筆者も年始から海外に幾つかの出版譜を注文し、その価格に閉口したところ。読者諸賢が、この厳冬の世を無事に生き抜かれんことを切に祈念するものである。

そのような時代にあっても、新しい音楽は生まれ、新しい世代が活躍しはじめる。ことに作曲との関連でいうと、ここ数年で、若手から中堅が組織する、現代音楽の演奏の新しい団体が生まれているところが目を惹く。たとえば、ピアニストの田中翔一郎が代表をつとめるアンサンブル・プラットフォーム、作曲家の久保哲朗によるアンサンブル・トーンシーク、フルート奏者の内山貴博が組織し、作曲家の山本哲也が監督するアンサンブル・リカレンス、作曲家／指揮者の浦部雪を中核とした演奏家たち。彼らはそれぞれ、リゲティの《ピアノ協奏曲》(8/14)や、ブーレーズの《ル・マルトール・サン・メートル》(9/12, 9/22)、《デリーヴィ》(10/9)、グリゼーの《ヴォルテックス・テンポラム》(9/13, 9/19)を披露するとともに、日本人若手の作品を組み合わせ(佐原光、中嶋達郎、波立裕矢8/14、河西祐季、渡部瑞基 9/12, 9/22、北爪裕道、斎藤拓真 10/9)たり、別に自らの個展を開催したり(浦部雪12/19)している。

また、2025年は、芥川也寸志(生誕100年)、福士則夫(同80年)、細川俊夫、南聡、藤枝守(同70年)、権代敦彦(同60年)の記念年であった。芥川也寸志においては、その名を冠したサントリー芥川也寸志作曲賞の選考会(8/30)冒頭で作品が演奏された他、日フィル(5/9, 5/10)、都響(6/5)などが作品を取り上げ、アマチュアオーケストラの新交響楽団が3回に亘ってその名を冠したコンサートを開催(4/19, 7/21, 10/13)。アマチュアながら日本人作品の紹介に貢献多大なオーケストラ・ニッポニカが、芥川を特集したコンサート(4/27)を限りに休止状態に入るというニュースもあった。旧奏楽堂での企画展と、その中での作品個展(11/15)も開催された。福士はチェリストの山澤慧が福士作品を中核に据えたコンサートを開催(11/11)、未初演の初期ピアノソロ作品が披露される会もあった(瀬川裕美子12/6)。細川作品の演奏機会は多いが、7作目にして初めての国内委嘱となるオペラ、《ナターシャ》(8/11~8/17)の新国立劇場での初演は特筆されよう。南は合唱作品による個展(11/30)が予定されていたが、本年(7/12)へと延期となった。藤枝守は、植物文様シリーズ(3/17)、珊瑚ガムラン(10/24, 11/16)などで、存在感を示した。権代敦彦は、尾高賞を受賞し、N響のMusic Tomorrow 2025(6/26)にて受賞作が披露され、加藤訓子ら(9/20)や谷口知聡(11/7)による個展も開催された。

例年、本欄でご紹介している、現代音楽関連行事をまとめた、「現代音楽イベントカレンダー」では、昨年一年で477件が登録されている。これはあくまで首都圏に限っての話で、コンポーザー・イン・レジデンス制をもつ名フィルや、二回目となった金沢実験音楽祭(3/5~3/9)のような、地方での意欲的な取組は洩れている。それでもこの数である。評者が全てを網羅することは物理的にも不可能なのだが、幾つかを選んでご紹介してみよう。

オペラでは、前述の細川俊夫《ナターシャ》の他、木下牧子《陰陽師》(東京室内歌劇場1/31~2/2)、酒井健治《平家物語~平清盛~》(10/4, 10/5)、オーケストラ公演では、夏田昌和などスペクトル系の作品を集めた都響(4/30)、土屋雄、山本純ノ介、平井正志、佐藤聡明を初演した日フィル(7/11, 7/12)、石黒晶が演奏された「オーケストラ・プロジェクト」(12/3)などがあり、作曲家の個展(に類するコンサート)としては、今堀拓也(1/29)、坂東祐大

(2/22), 間宮芳生 (5/13), 平山智 (6/8), 塚本瑛子 (8/1), 近藤浩平 (8/16), 「ひだまつり」と題された飛田泰三 (9/20, 9/21), 東京オペラシティ文化財団による西村朗 (9/24), ギタリスト土橋庸人のリサイタルとして開催された渡辺俊哉 (10/30), ピアニストの川畑哲佳による木下正道 (11/1), アンサンブル・コンテンポラリーαによる湯浅譲二 (11/12), 佐原詩音 (12/23), 田辺恒弥 (12/24), フィディアス・トリオによる山本裕之 (12/26) などがあった。

邦人への新作委嘱の常連的な個人、団体のコンサートとしては、橋本晋哉がリサイタルで小倉美春 (2/26)。ピアニストでもある小倉美春は、コンテンポラリー・デュオ (3/5)。「新しい耳」 (3/9), 東京オペラシティでのB→C公演 (6/10), 東京現音計画 (12/12) で、作曲・演奏・制作のそれぞれで存在感を示した。低音デュオが (定期) 演奏会で川上統, 安野太郎, 山田奈直 (4/23), ヴォクスマーナが池田拓実, 斉木由美, 伊左治直 (3/22), 三輪真弘, 福士則夫, 伊左治直 (10/30), 混声合唱団 空が大熊夏織 (6/1), 會田瑞樹がリサイタルで八村義夫に絡めた自作と藤枝守 (10/3), 高橋アキがやはりリサイタルで桑原ゆう (10/8) などが挙げられよう。

演奏面でとりわけ感銘を受けたのは、邦人作品ではないが、東京オペラシティ・コンポーザムでの、ゲオルク・フリードリヒ・ハースの2作品 (5/22)。微分音を駆使した管弦楽作品が。あれほどの精度で表現されるならば、邦人新作初演の世界も変わるだろう。また、サントリーホールでのサマーフェスティバルでの、ドナシエンヌ・ミシェル＝ダンサクによるジョルジュ・アベルギス《レシタシオン》 (8/30) も、その演奏の精度の高さに驚かされ、こうした海外の突出した才能を、日本で紹介することは、超円安の逆風下であるが、まだまだ必要と痛感させられた。

コンクール関連では、ゲオルク・フリードリヒ・ハースが審査員をつとめた武満徹作曲賞 (5/25) では、我妻英と金田望が、一位を分け合い、サントリー芥川也寸志作曲賞は、松本淳一, 廣庭賢里, 斎藤拓真が賞を競い、松本が受賞。この場で初演された二年前の受賞者：向井航への委嘱作品も大いに話題となった。日本音楽コンクール作曲部門は、室内楽作品対象の年回りで、非公開の演奏選考の結果、徳田旭昭が1位、日本現代音楽協会が贈賞する現音新人賞は、公開選考 (12/3) の結果、浦野真珠が受賞した。浦野は、松平頼暁の遺贈によって設立された、特に優れた成果に対して授与される「松平頼暁賞」の最初の受賞者ともなった。

また、藤井一興 (1/18), 松永通温 (4/2), 刀根康尚 (5/12), 藤原義久 (6/3), 棚田文紀 (6/24) が他界し、海外からは、ソフィア・グバイドゥーリナ (3/13), ペーター・アブリンガー (4/17), ペア・ノアゴー (5/28発表), ラロ・シフリン (6/26), ダニエル・レンツ (7/25), ロディオン・シチェドリ (8/29), ジャン＝クロード・エロワ (11/19) の訃報も届いた。

石塚潤一 (いしづか・じゅんいち)

1969年、東京都生まれ。東京都立大学理学研究科修士課程修了 (物理学)。2003年、柴田南雄音楽評論賞奨励賞を受賞。以後、音楽批評家。同時代音楽を中心にクラシック音楽、映画の批評なども行う。読売新聞、音楽の友、音楽現代、ユリイカ別冊などに寄稿。国立音楽大学、福井大学等で現代作曲家、音楽批評について講演。2008年より、コンサートの制作を行う。企画団体TRANSIENT代表、CIRCUIT同人。たまに頼まれ、作曲家や演奏家の写真を撮影する。